



花のぎ女使の圖

秋七草



へ13
3917

物のな
作者 曲亭馬琴著
浮世繪師 歌川豊廣畫

浪華
文金堂
書肆

七月七日何や瀬の女房のせうもそふあひといは

ふりせそと某ははなねよはけとたてまつらふまの

はしりの雨うねも傘とさそ高きいふなをたてまつる

奈のめぼし義を束の人乃りそえようて繪をばしそ縁が

たそそせものわつもの起るふそあきまどもかの愛の

いそそそをたぬのたふいそそそをたぬのたふいそ

たそそふそつて花あふの使といふたふをばすふかひは

せそそそあふもつてつてつてつてつてつてつてつて

ころやんぞるる君のまゝもそめふようん好車のめ

解ぶと久し草紙の名を秋七草といふは周よみそ載つ

花ノマモヤウ島スキサ郎花梅授
金花蓮小車黄菊以上七種上ヨリコトヲ参

六代書人

此書竊ひそかに細こま要記ようき櫻雲記おううんき吉野拾遺きちよしやくい南朝記傳なんてうきでん圓太
 曆れき鎌倉大草紙かまくらおほくさし足利治乱記あしかがちらんき等の諸説しよせつを据よととくく事こと多おほくふ
 楠くすの氏うぢの事蹟じせきを述のととくく亦また彼か三楠實録さんくすのじつろく楠くすの戰いくさ功こう實じつ錄ろく
 楠くすの家け全書ぜんしよ楠くすの軍物記ぐんぶつき楠くすの物ぶつ移うつ木きの類るいと周しうくくべべ事こと多おほくく
 寓言うごんゆゆくく只ただ阿あ染せん久く松しょうが奇耦きくをいいととくく姑なほ楠くすの氏うぢの
 名なを借かるるのの夫そ艶曲演戲えんきくえんぎの誨し淫いん猥わい褻せつ多おほく小説者せうせつしや流りうハ取とりとど
 更さらふ松しょう染せんの節操せうさう大録たいろく七草しちそうと命いのちるるのの華は鏡きやうの花はな
 の事實じじつの實じつをいいととくく一首いしゆを證しやうととくく一部いぶの要ようを

序

書

積雨初銷しよくうしよく新月臨軒しんげつりんけん忽たち見みおお至き兼か燭そく
 出い廷てい即すなはち書肆しよせい之の刻堂こくどう主人しゆじん也なり自陳しよちん曩なん
 者しや浪華らうか書林しよりん森もり本ほん生せい有あり竊せう請きん于より先せん生せい
 使し僕ぼく致いた意い焉や今いま後ご二に更さら樂らく焉や書しよ未み告こ
 成なり敢た請きん余よ曰いふ曩なん者しや森もり本ほん氏うぢ請きん蓋か在し編へん
 輯しゆ院えん本ほん所しよ記き阿あ染せん久く松しょう情じやう死し之の事こと也なり

余熟思之。夫久松以一覽兒奸于年
家女。妨其婚期。遂至情急勢迫。相俱
枉死于庫中。則是不義不孝之大者。
宜以為戒。豈可更筆之冊子。以宣
淫風哉。此余之所以握筆踟躕未應
其請也。文刻堂笑曰。先生之言固是
矣。但書賈相謀。不在義而在利。森本
生以此事煩先生。亦是趁時耳。已加
之千里之請。不可峻拒。冀再思之。於
是余乃感其言有理。翻案數日。主其
事而不拘其迹。換骨奪胎。別自編撰。
一個小說。以塞其責。其間勸善戒惡。
叙入情託風教。此是微意。所存實作
者一片老婆心也。嗚呼。余雖以著作

自號^下上比年撰述幾二百部。事實請索
 相^二踵^一于門。不暇運思以故。往之不免
 疎漏誤^ル之稍也。況^ヤ茲書僅出^ニ乎數
 日。新業唯恐^ル文詞鄙陋。其不足^ニ以^三從^一
 動^{スルニ}從^ニ善之良心^一矣。閱者幸恕^ニ之可也。
 文化戊辰年孟秋中浣。著作堂主人
 喜子江戸飯台隱居



秋七種

第一芳萱
河内二郎正元

吾屋戸乃一村
芥子乎念児
余不令見殆
散都類香聞

山家税平

秋野之草花
我采乎押靡而
來之久毛知久
相流居可聞

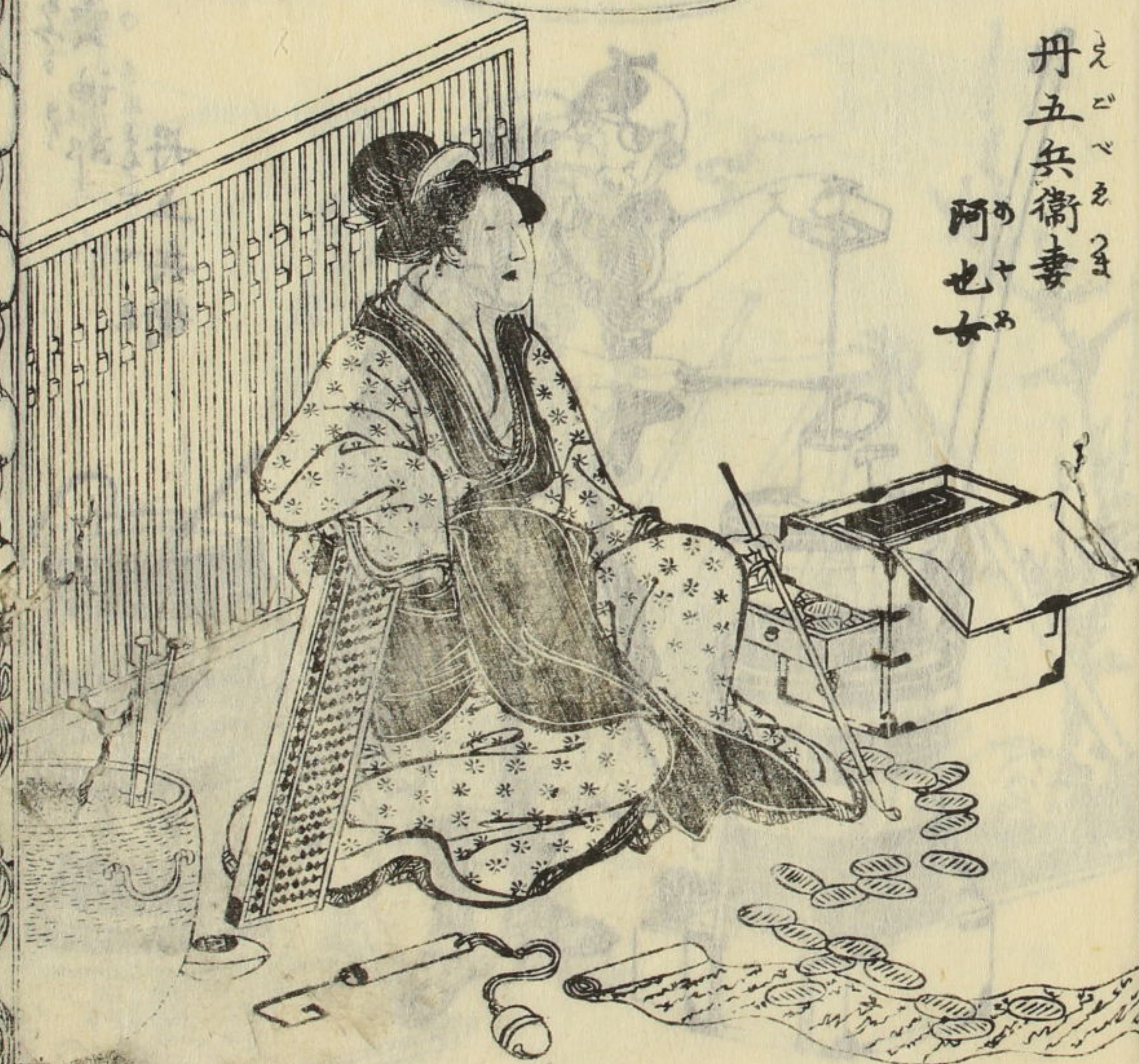
秋七種
芒花



丹五兵衛妻
阿也女

我屋戸乃葛
葉日殊色付
奴不座居者
何情曾毛

秋七種
葛花



此里者繼而霜哉
置百野介吾見之
草者毛義和多里
家利

秋七種

第四
藤袴

賣油郎
丹五兵衛



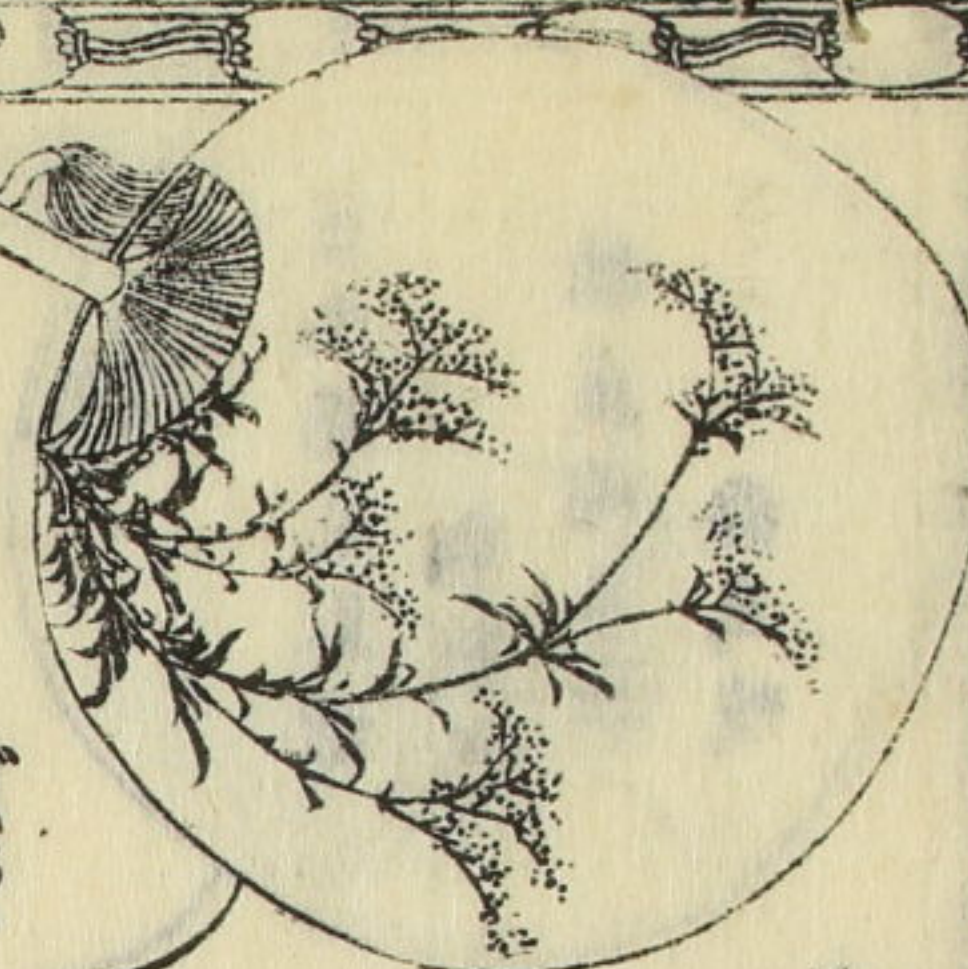
秋七種

第五
牽牛

言出而云忌添
穂真閑不出
應為鴨

野崎久作

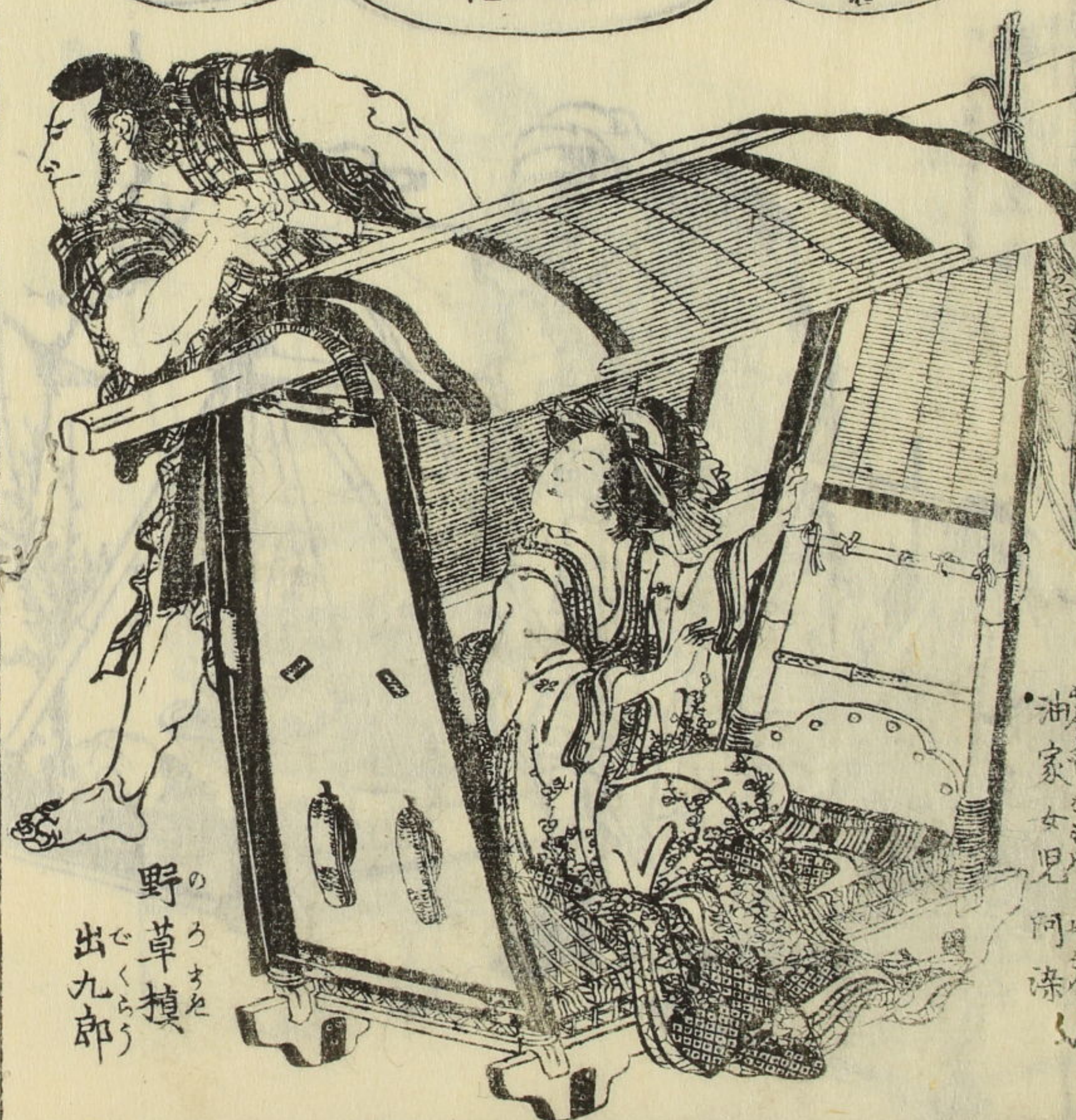




秋七種

第六
女郎花

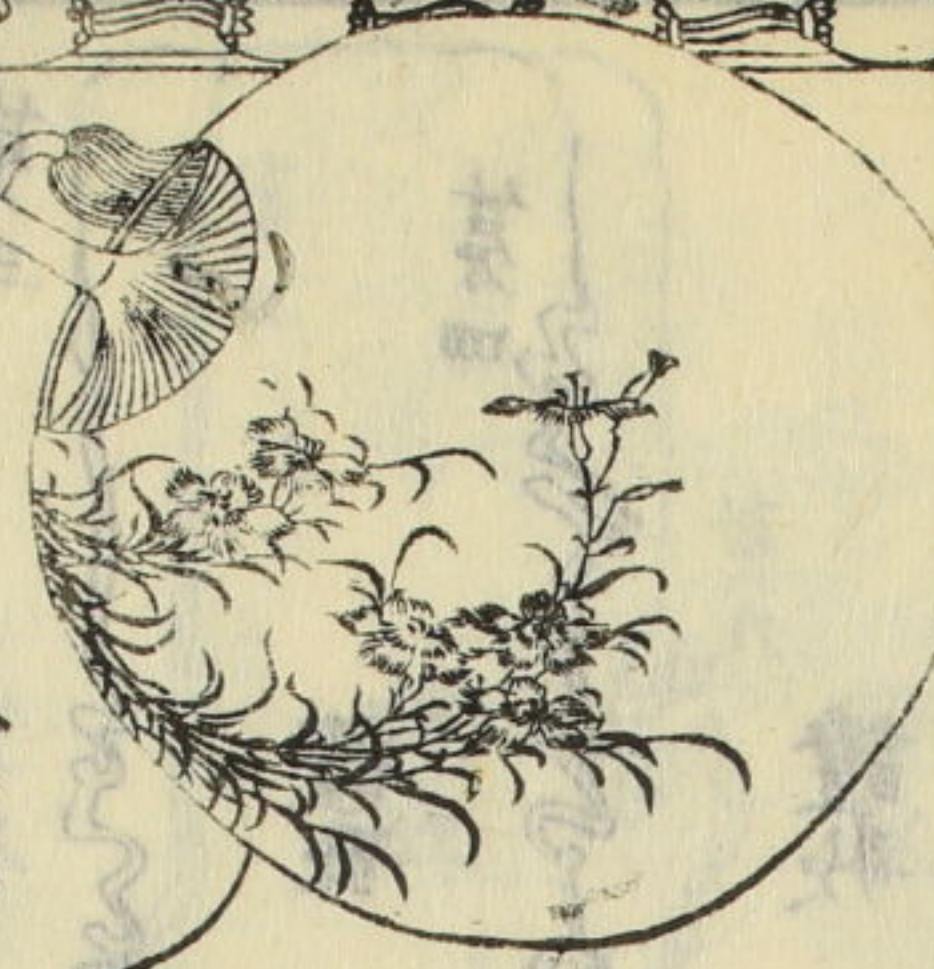
手取者袖并
丹覆美人部師
此白露余
散卷惜



油家女児阿染

野草
出九郎

小野久松



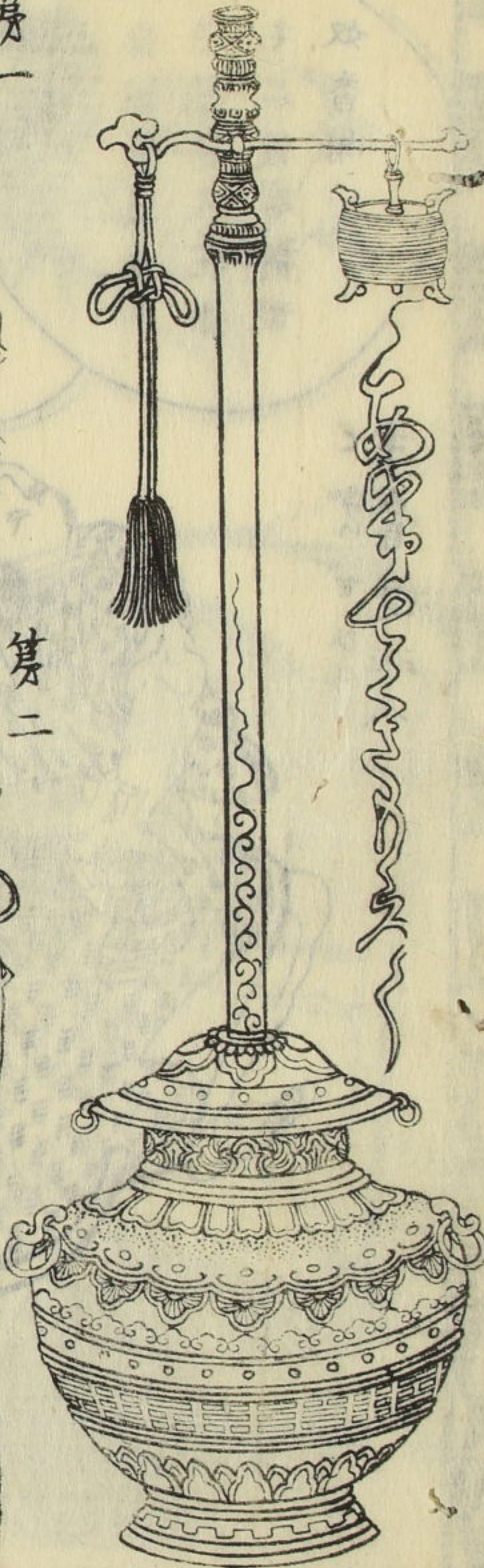
秋七種

第七
瞿麥

毎朝吾見屋戸
乃瞿麥之花余
毛君波有許世
奴香聞



主音是非八



第一

第二

證歌

都もあらぬ人とも麻のまゝをみちの山とて
よもひのうちはまゝの草をみちの山とて

第三

證歌

ゆきも風もたかくはまゝの浪をみちの山とて

第四

證歌

物も人も野の原をみちの山とて

第五

證歌

秋もはるもみちの山とて

第六

證歌

又た人もまゝの山とて

第七

證歌

山も人もまゝの山とて

第八

第九

證歌

まゝの山とて

第十

證歌

まゝの山とて

秋野亦咲有花乎指折可
 伎數者七種花
 芽之花乎花葛花瞿麥之
 花姫部志又藤袴朝貌之
 花

右二首山上憶良詠秋七種詩

松林情史秋七草卷之一

東都 曲亭馬琴編次

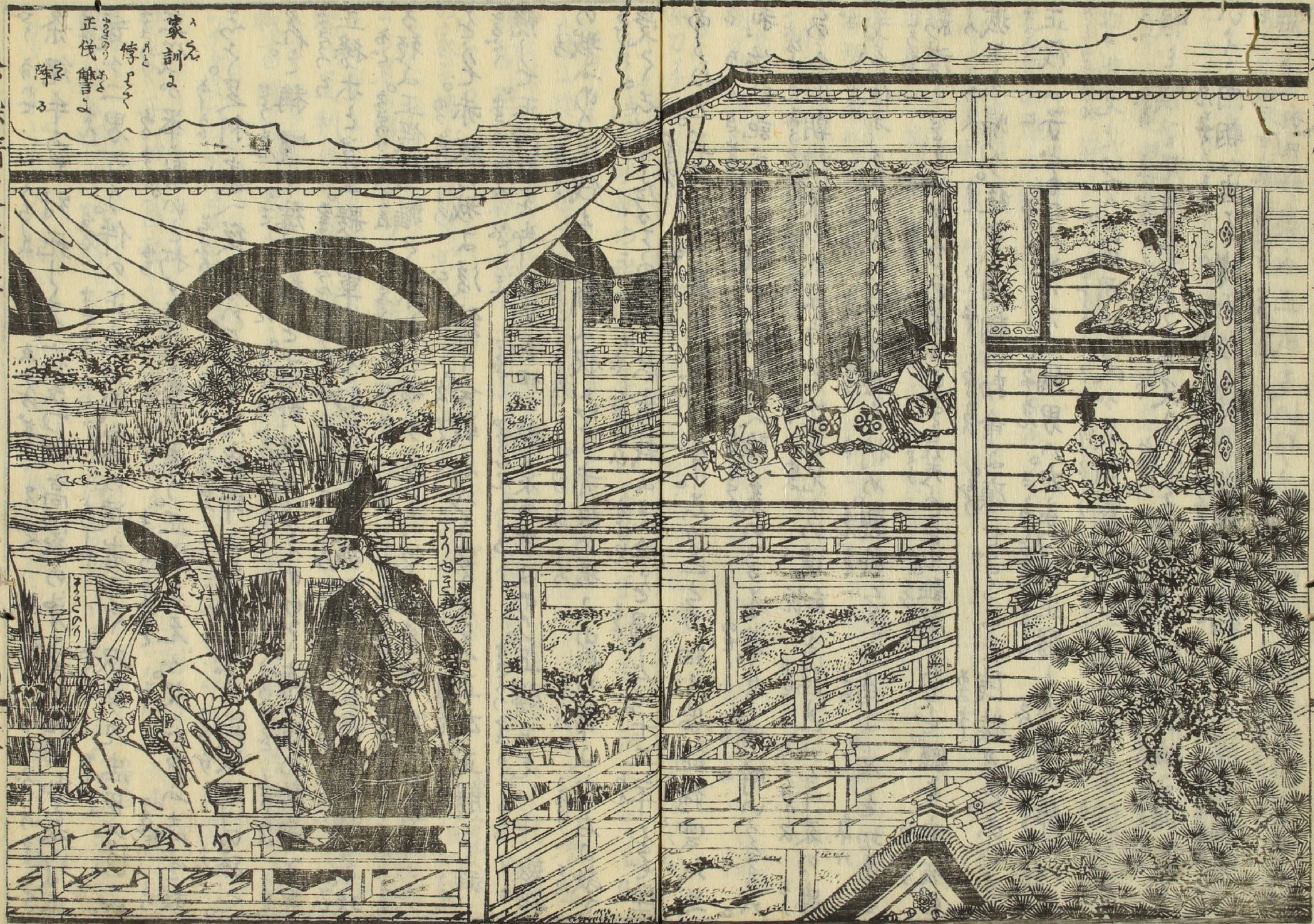
第一芳宜小名 鹿鳴草

都也咲負とも鹿の鳴く。名よみ草の秋の山里と詠トん。浮世の秋
 憂ふるん。いとものたれ十善の君ぞ。吉野の山居しひる頃。南朝
 股肱の武臣なり。楠左馬頭正儀と。正行か方あり。正成か二郎と。
 抑河内判官橘正成。楠正澄か嫡男あり。その先緒兄公より
 出たり。滅忠武畧。古今は拔萃し。世は許され良將あると。中運終ふ
 時を記す。ゆく末のころのふりうり。延元のとめの子。五月を志の又の
 日。才正季等と。冠を防ぎ戦ひつ。横洲漢河の上あり。或る討つ
 う。このふり同胞を去る。腹を切る死にけり。後醍醐の帝の

惜せむ。正三位近衛の中將を贈り。横河泉三州の太守とす。
 う。仰下され。生残する親族ホカ面目い。敵由自方也。嘆賞せざる。
 なる。正成が嫡子正朝。その志。親父から。とも。ゆ。忠孝
 其氏兄方を討滅。君父の仇を報んと。重なる。忠孝
 空しく。憂苦の中。其長。足利の大軍と挑戦。勝。あ。だ
 とい。長。長。長。謀略用。世を。あ。だ
 南帝。村上院の正平四年とす。正月五日。左衛門尉兼河内守。橋正朝
 其の才。右。尉。橋正時。河内。河内。四條。繩。手。又。駐。向。京
 家の大敵。血。敵。撃。自方。残。寡。撃。是。れ。脱
 う。脱。る。り。魚。く。バ。梓。う。を。教。よ。名。を。と。む。と。
 詠。言。の。紫。を。い。ふ。と。わ。同胞。死。を。実。北。朝。の。負。和。五
 年。り。後。二。郎。左。衛。正。俊。の。正。成。を。波。る。居。も。い。惜。の
 り。の。思。食。四。位。の。左。馬。頭。う。る。正。俊。の。志。又。あ。兄。あ。
 及。ね。ど。家。の。正。成。が。子。正。朝。が。才。多。ん。バ。武。畧。由。凡。常。少。の。日。本
 過。手。を。敵。あ。け。千。劔。破。赤。坂。の。城。を。築。と。河。内。あ。る。な。る。の
 の。と。畿。内。の。強。敵。由。手。を。振。入。裡。和。田。恩。地。湯。浅。三。輪。の。親。族。正。俊
 を。佐。足。利。の。大。軍。を。攻。靡。一。文。和。の。ろ。の。新。将。軍。茂。詮。京。都。を。没。落
 近。江。路。は。北。朝。の。帝。宗。光。院。光。嚴。光。明。の。兩。上。皇。と。南。軍。は
 捕。は。吉。野。へ。逃。り。ひ。と。併。楠。正。俊。と。和。田。正。武。が。勲。功。を
 ぶ。後。光。嚴。院。世。を。御。り。足。利。の。武。威。衰。を。蝸。牛。の。角。の。毒。ひ
 小。縣。の。年。を。経。南。朝。の。正。平。廿。四。年。北。朝。應。永。二。年。三。月。の。ろ。後。村。上。院。崩
 け。す。り。聖。算。四。十三。と。す。一。應。成。皇。子。吉。野。の。宮。は。受。禪。の

に。是を法龜山院とす。さるも楠正俊の。その年本種この謀畧
をす。し。然んとする。動もせん。殿上人。生上達部の長。食殘。阻へ
らる。遺恨。さる。今。茲。主上。み。世。の。花。の。梢。の。雲。か。く。ま
し。忽。地。崩。ひ。く。世。さ。い。や。う。と。浅。す。く。南。方。衛。護。の。志。を。變。じ
老。黨。の。諫。も。聽。じ。子。ど。も。ら。あ。あ。せ。ぐ。く。あ。の。び。く。は。管。領。頼。之。は。消
息。し。く。是。利。家。へ。降。系。と。さ。す。誓。書。を。り。く。や。う。入。ま。し。八。時。の。將
軍。是。利。家。満。速。に。許。容。め。り。く。右。馬。頭。頼。之。赤。松。判。官。亦。を。捕。め
赤。坂。の。城。へ。遣。さ。る。わ。く。同。年。四。月。下。旬。は。正。俊。入。洛。し。頼。之。が。宿。所
に。到。り。款。を。述。勸。盃。了。く。彼。人。は。秀。川。に。是。満。將。軍。は。見。系。し。く。
龍。尾。と。い。ふ。太。刀。を。進。め。せ。り。く。是。満。も。殊。に。頼。之。と。睦。を。交。え。く。件。の
太。刀。を。秘。藏。せ。り。く。さ。る。の。條。に。物。結。の。發。端。お。く。例。の。寓。言。の。さ。る
あ。ね。ど。正。俊。の。王。虛。實。お。ぼ。つ。る。く。あ。う。ま。ど。も。細。く。要。記。様。雲。記。是
利。治。亂。記。亦。は。正。俊。が。是。利。家。へ。降。系。の。の。を。載。り。く。嗚。呼。い。う。る。ま。は。
あ。へ。南。朝。棟。梁。の。武。臣。と。く。又。と。兄。と。の。遺。訓。を。忘。れ。廿。年。來。の。忠
義。を。化。め。く。仇。人。の。前。に。腰。を。折。め。親。族。と。さ。が。為。に。齒。を。切。る。と。も
影。護。と。せ。ど。世。の。人。の。あ。み。あ。み。と。笑。へ。と。も。耻。辱。と。せ。ど。懸。く。赤。坂。の
城。に。立。歸。り。後。に。南。朝。の。勅。命。に。應。せ。る。と。さ。浅。猿。と。さ。あ。の。と。さ
正。俊。の。子。ど。も。二。人。あ。り。く。嫡。男。は。左。衛。門。尉。正。勝。と。名。ま。二。郎。は。河。内
守。正。元。と。い。ふ。さ。の。同。胞。は。是。利。家。へ。降。系。し。く。う。う。を。受。け。い。く
恨。と。憤。り。兄。弟。の。う。う。と。も。あ。う。又。う。う。と。さ。く。千。劍。破。の。城。に。擔。籠。り。
い。く。南。朝。へ。忠。を。竭。し。程。に。是。子。忽。地。に。不。和。と。さ。り。ぬ。亦。捕。め。一
族。と。和。田。和。泉。に。正。武。と。い。ぬ。正。平。四。年。の。春。正。俊。と。さ。り。ふ。四

松浦清史卷之一



家訓
正代
降

條繩牛ふて討死し。右京府尉高家の才少く。和田和泉守正
遠か二男あり。件の正武の武畧の達者なり。双なる忠臣なり。正
正儀が挙動いと朽そと怒り罵る。正勝正元が父とより志を授
ふ。是利家へ後さる。さうな忠節ふそ。さうな正成の孫と
れ。稱讃し。律の趣を吉野殿に告ぐ。南帝の勅命を稟
正勝木とより。殿の軍兵をねて。赤坂の城へ推寄せ。息をも吻せ。攻
る。正儀堪難く。京都へ援兵を乞ふ。山魚柴竹山ホ数千の兵
をりて。赤坂の城に後結し。合戦あぶく。さうなり。正武正勝が鋒
鋭く。正儀既を中。和田の龍泉の城あり。正勝正元ハ千餘破
の城あり。正儀と其の間は狭く。赤坂の城あり。常は左右の敵を
受く。さうなる。只赤戦は光陰を過し。十三年をむ。経
る。寺は北朝の永徳元年夏の首なり。正儀長を病ふ。さう臥
。秋は遠く。病の床より。さう。未のときを。ひ。す。あ。ゆ。
親同胞ハ南朝の忠臣なり。邦家の為。命を。名。の。朽。ぬ。楠
の家を。さう。不肖。と。律。さ。及。び。さ。の。弱。官。の。昔
より。身。を。遣。さ。う。耕。し。洋。を。植。さ。う。と。耕。し。士。を。難。ひ。兵。を
煉。り。是。利。の。文。敵。と。戦。ふ。毎。日。絶。さ。う。下。さ。う。不。覚。の。敗。を。取。さ。う。百
戦。百。勝。の。計。畧。を。献。さ。う。用。ひ。さ。う。の。の。聖。運。の。傾。く。亦
さ。う。及。び。臣。さ。う。の。道。の。竭。し。今。は。さ。う。の。や。是。利。將。軍。へ。伏
後。子。孫。は。富。貴。を。傳。へ。さ。う。君。は。三。世。の。二。代。共。天。を。戴。さ。う。
雙。歌。ふ。媚。く。阿。容。さ。う。是。利。家。へ。降。来。せ。の。生涯。の。恨。さ。う。
さ。う。子。さ。う。の。親。さ。う。の。義。さ。う。の。孤。忠。を。竭。さ。う。賢。さ。う。の。家。乃

松遊情史卷之

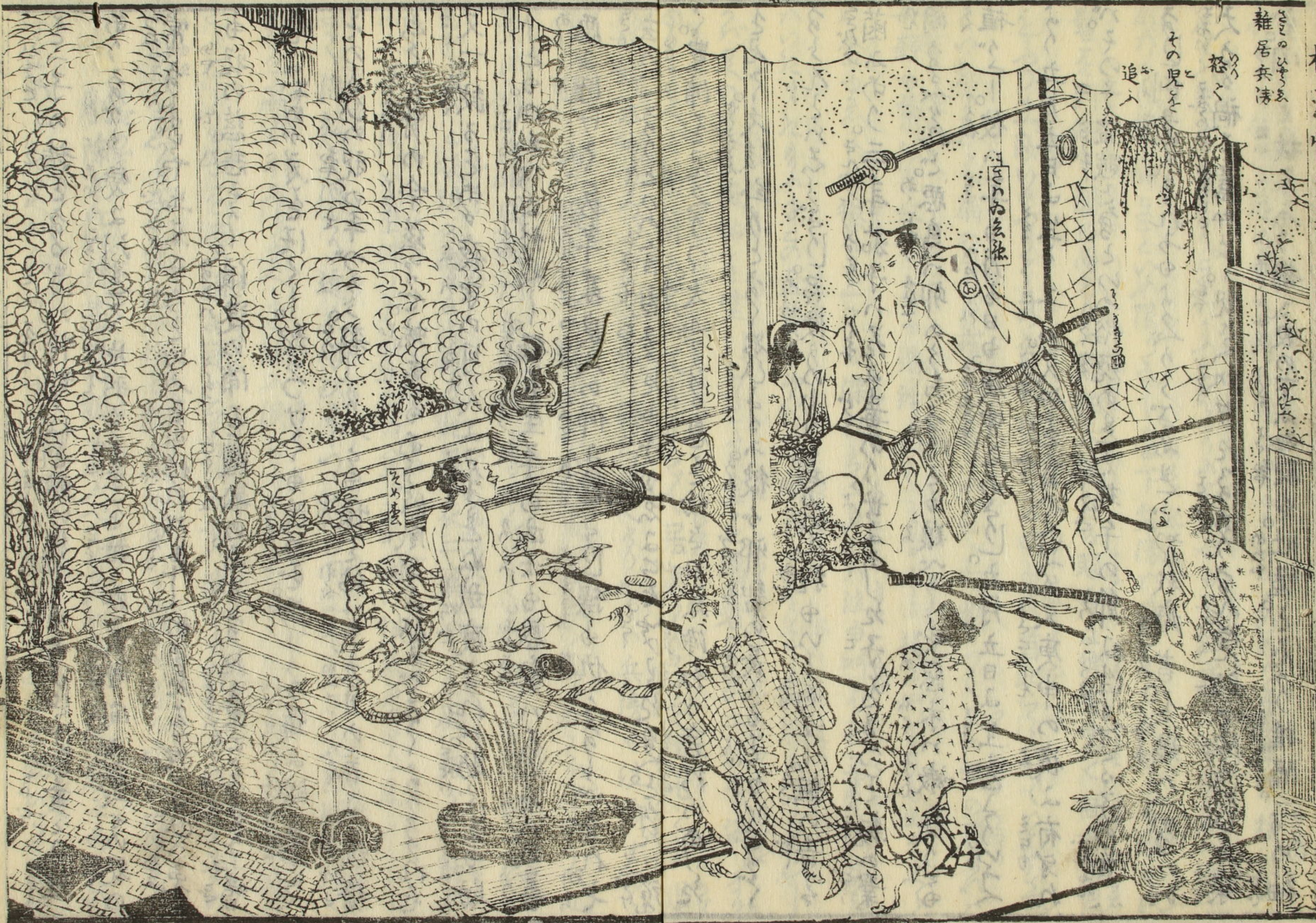
雜居兵衛

怒る

その見を

追入

さういふ



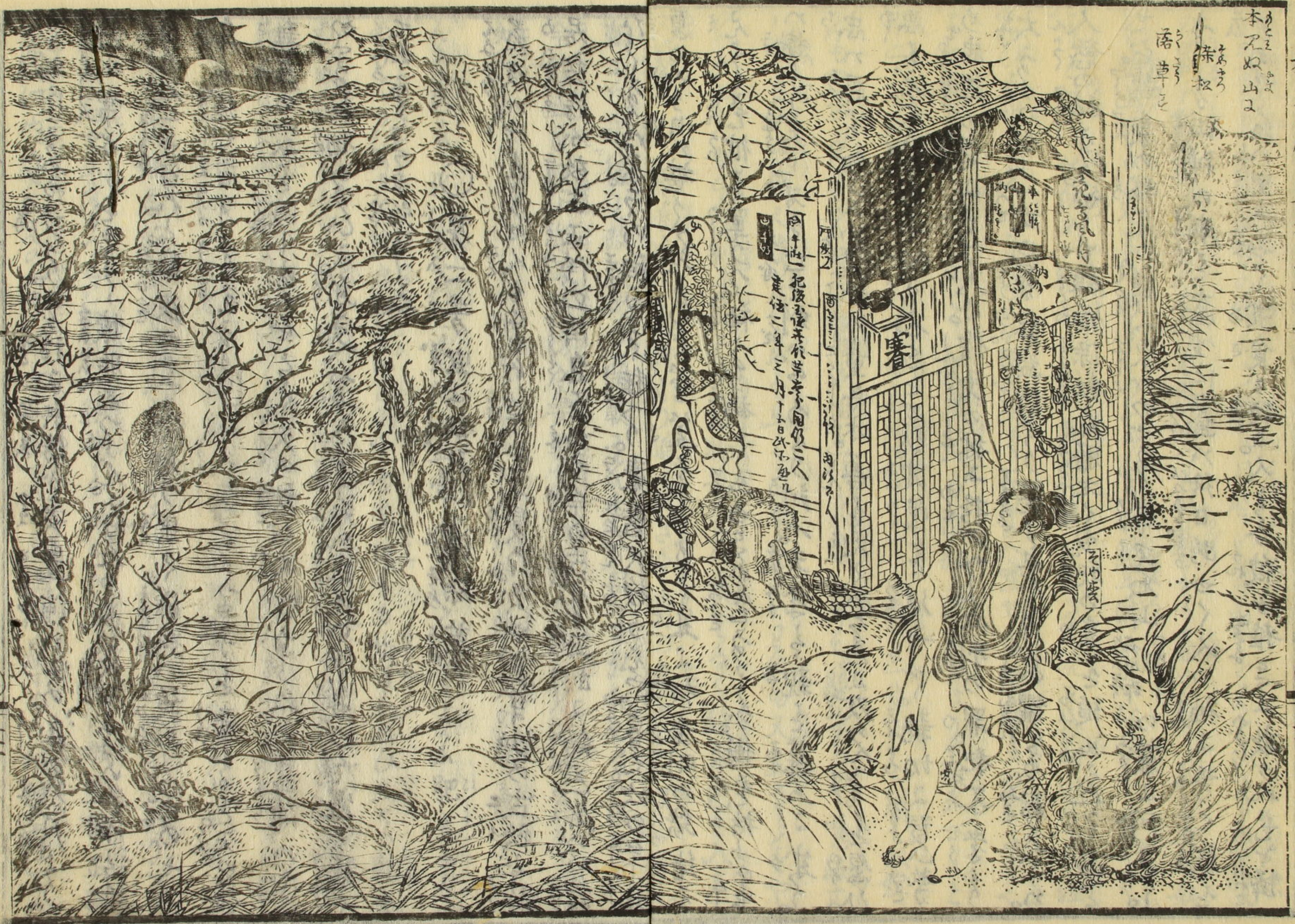
そ一子の指とある牙の惜めねど。聴かれずもあつぐり。夢と理
ありあがり。愛は引まき片羽ある。子を捨てる世間のうづの親の
常るゝや。出来らうといふと中けれ。免一むを下一つびの免を
も親の慈悲ぞう。浪速の浦を漕船のあつた童ごうより。嗜
慾ふかのがえをほく。あつてくも改めむ。あつた道は踏迷ふ。
そのうづの親の手づり。殺しあつた恨を伝ふ。五才の春は痘瘡
あつ。九才の今茲まで。蛇気もあつた風はひる。さうさうさうを
又一つ。缺るとある夜束の月。人よふまね。我度るれば。助んとも助
トとも。ゆゑ一つはつて。猛を生ずの武士も。恩愛はあつため。善
悪は分けとある年。来良人の仰は。恃り。操も仇とあつた。七
はの。一つとある。言をきかぬ。子もあつた。さうを。あつた。口説
は。奴婢も。あつた。さうも。さうも。疎ら。さう。さう。兵隊も。泣。啣と。さう。
勢ひ。猛。あつた。揚。あつた。又。の。鞋。あつた。さう。あつた。さう。あつた。子。の。さう。
豊浦。の。さう。由。國府川。を。あつた。さう。さう。赤。裸。さう。赤。松。あつた。
と。さう。ふ。と。投。被。る。愛。あつた。さう。さう。單。衣。二。重。の。字。を。厨。艱。が。引。結。ぶ。
間。は。又。兵。隊。の。豊。浦。さう。四。五。兩。の。金。と。系。圖。の。横。巻。を。さう。来。さう。
さう。赤。松。を。同。う。近。く。あつた。さう。袴。の。間。は。手。を。さう。入。ま。一。肘。を。張。て。
肩。を。高。く。さう。さう。さう。眼。も。涙。を。浮。め。室。は。人。の。親。の。さう。の。鳥。夜。
あつた。ね。の。子。を。あつた。道。は。迷。は。さう。あつた。母。の。涙。も。歎。け。さう。あつた。子。の。
可。愛。を。さう。さう。あつた。ね。ど。教。が。さう。を。い。ふ。せん。牙。の。中。の。腐。ま。る。
さう。刺。除。さう。ば。餘。毒。骨。髓。さう。さう。さう。さう。今日。さう。親。も。あつた。
子。は。あつた。さう。の。向。さう。人。方。へ。卦。け。り。助。が。さう。今。を。助。る。さう。さう。

示一寸の玉より五分の魂あり。彼が目今の挙動をえん。いふ思愛
の羈は絶えり。がえりも忍ぶべくハ孰れを忍びざる。りのども這奴
を追せ。といふたれあぐいそがとみぞ豊浦ハさびさううくそ。
うとはつ伏せめが。漆松を母の顔を。けくぐとさう眼を母のいこるは
あひそ。叱るうかうさうい。さうさうさうへ坐せ金銀珠玉いへさうそ。
うた衣どもを盗さうさう。おん月一人を漆松か。いと安ううう艱いべ。と
不ううふい子うう。いりう母を浅猿く。又由果止く口を封。奴婢
どもい舌を巻く。頻は驚さ怖く。うは漆松うう腹さうさう。噫汝ホ
い物食ふ木偶く。うの家をさうさうさう。いれ又主さうさうや。
いふまどとゆらう利く。う弄物うんどの残さうさう。紙は包を入。こ
夕餐の割籠准はく。跡より追著さ今宵の宿さうさう。へ送さう。
夏の入り目の堪さうさう。のど管はまをさうさう。板金剛の端緒を
えん。とを彼を罵う。袖う拂さうさう。樹を枯さうさう。
ハ樹う生。才を亡を剣。うさうう。夫孝を親を慕ふ。さうさう。
忠ハ思を知らさう。世の童子ホ。善をえん。さうさう。及んを愿ひ。
悪をえん。さうさう。似ざんをさう。才学を後さう。親切は習ハ勢
め忠孝の道はさう。信義の林ハ格。五刑の罪犯不孝さう。
大さう。一世の暴悪盗賊さう。甚さう。只懼る。さうさう。
人慾の私さう。うと難居漆松。膽太く。親の家を追さう。憂と
さう。龍泉の城さう。遙さ東のやさう。奉えぬ山。石川郡。の簾は到。う。
う。山神の廟を森堂。と昼ハ終日。路さく人の袖は携。う。残を
え。さう。ハ里さ出。求食る。人さ。彼ハ推さ。欺られ。を憐

本石如山又

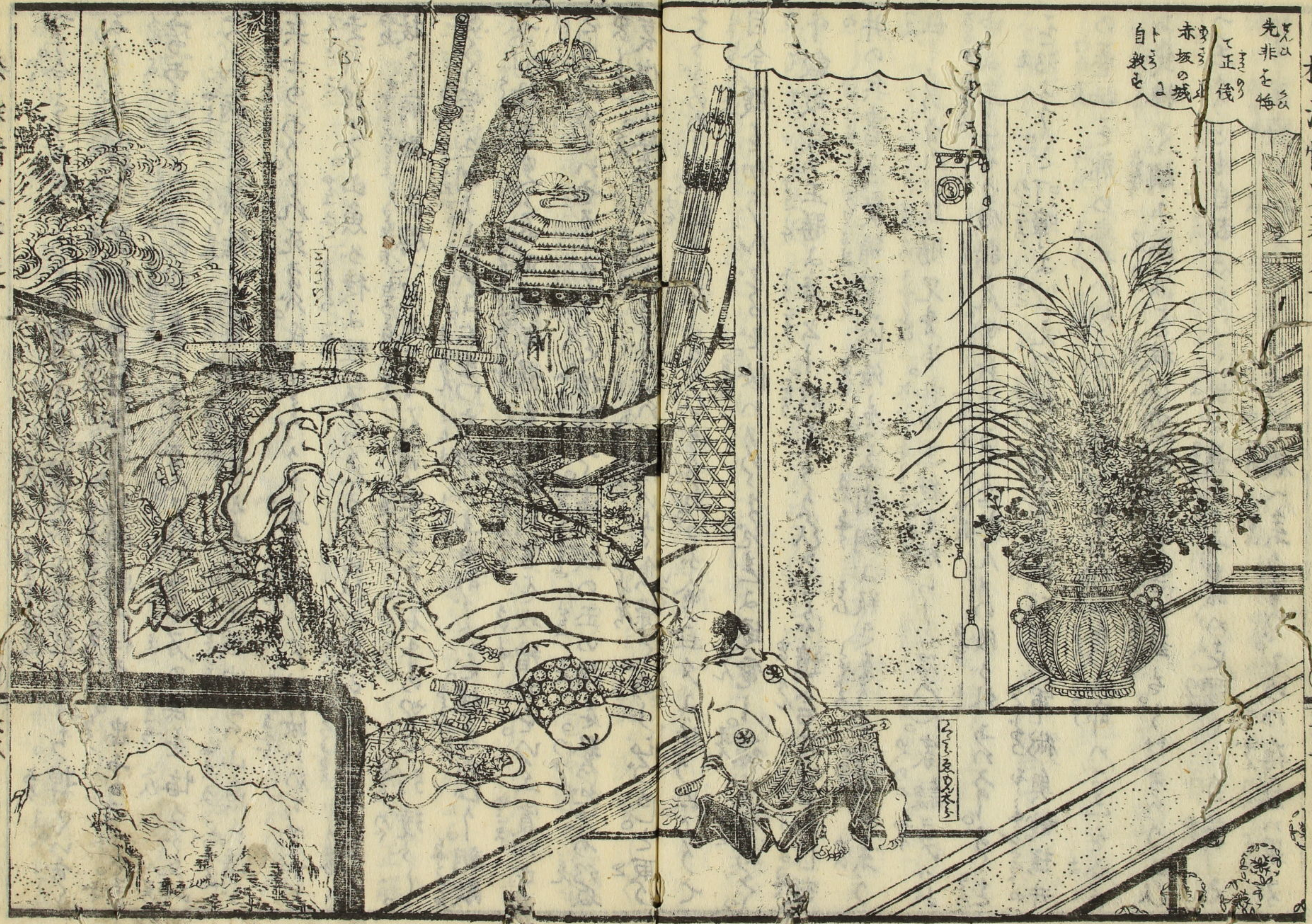
赤松

番草



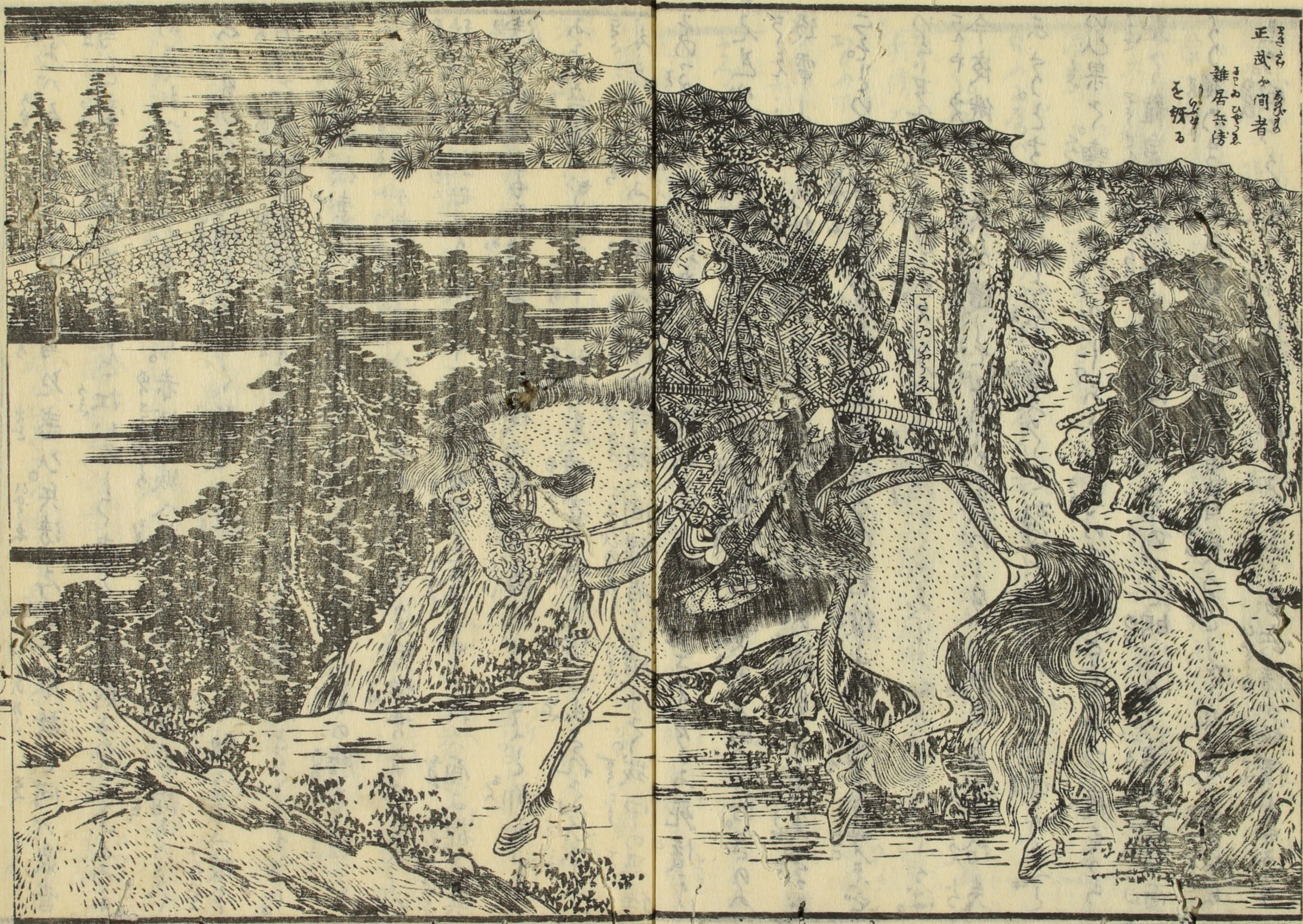
紀後三百年...
建德二年三月十五日

先非を悔
て正候
赤坂の城
自れを



正武加同者

難居兵傍
を頼る



み。これを飲よ。と。おを。連は赤坂の城。攻落し。松井の
一油を。復さ。といえ。氏情。勢あり。彼城へ。龍
これ。れ。ゆ。意。任。物。り。の。て。豊浦。子。葉
小。捨。悲。歎。め。る。ん。も。あ。ね。る。中。は。給。を。化。せ。
傷。の。人。は。笑。ま。し。と。志。を。励。し。つ。憂。も。い。ん。ど。憂。は。堪。ぬ。忠。告。節。毛
ハ。婦。女。子。は。稀。が。日本。だ。ま。ひ。る。

松葉情史秋と草卷之一

鷹嶺先生著
名和判月書

新選 作文必用

中本 全二冊

右書ハ頭書作文類語數多ク揚ゲ本文ハ日用文ニ
皆々短文ニ綴リ小學兒童ノ作文ニ助書ナリ且ハ商
家ニ必ラス使用ニ可相成珍書本也江湖諸君購求
アラシク知リ玉可シ何方ノ本屋ニモ有外御求被下候

書肆

大阪並久寶寺町四丁目十八番地

文榮閣

前川源七郎

